『おもろさうし』における類推表記〈u→o〉 の再検討

間宮, 厚司 / MAMIYA, Atsushi

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

189

(終了ページ / End Page)

210

(発行年 / Year)

1998-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002659>

『おもろさうし』における類推表記 $\langle u \rightarrow o \rangle$ の再検討

問宮厚司

はじめに

今関心を持っているテーマの一つに、『おもろさうし』の表記とは一体どのようなものだったのか、という問題があげられる。

例えば『おもろさうし』には、「帯」を「おび」と「うび」、「肝」を「きも」と「きむ」のようにオ段とウ段の両方の仮名でもって書いた例があるが、こういった二種の表記が見えることに対しては、次の二通りの解釈が可能である。

①大和方言の○母音が沖繩方言ではu母音に完全に變化していたので、「うび」や「きむ」と書かれた。一方で、実際の発音はウビやキムになっていたにもかかわらず、大和方言の発音に還元して、「おび」や「きも」といった五母音的表記もなされた。

②大和方言の○母音が沖繩方言では、u母音に移行しつつある、すなわち過渡的な時期であったので、オ段とウ段の両方の仮名で表記された例が見られる。これは「帯」の発音が現代沖繩方言でウビであるから、オビからウビへの変化があつたと考えて、矛盾しない。

①の考え方は、大和方言の○母音が沖繩方言のu母音に対応していることを理解した上で大和的発音に還元しながら表記したことになるが、「うび(帯)」とか「きむ(肝)」とかは、たまたま方言的な発音のまま表記されてしまったと考えるものである。

②の場合に問題となるのは、「おもしろさうし」編纂当時にとのくらいへ○↓uが進行していたのか、ということである。つまりへ○↓uはかなり進んでいたのか、それともさほど進んでいなかったのか、あるいは半分くらい移行していたのか、という変化の程度の問題である。この点に関しては、研究者の間でも見解は異なる。なお、各説の紹介は、本稿の「おわりに」のところでも簡単に行う。

実はここで問題として取り上げたいのは、例えば「内」を「うち」と「おち」、「国」を「くに」と「こに」のように表記した例である。こういった表記については、「おもしろさうし」編纂当時にはへ○

↓uへの変化は相当に進んでいたと考えて、そういう状況下においてはウ段の音をことさらオ段の音に戻そうとする意識が強く働き過ぎ、その結果、「内」を「おち」、「国」を「こに」と表記してしまった、と従来解釈されている。そして、この種の表記は「類推表記」と呼ばれている。しかし、ウチ(内)やクニ(国)と発音されていたものを、ウ段の音をオ段の音に書き改めようとする類推の誤り(類推のし過ぎ)により、「おち」や「こに」と表記してしまったと考えることは果たして妥当であろうか。本稿では、この点について検討を加え、従来とは違った解釈の可能性を探ろうと思う。

一

本論に入る前に、本稿で扱う「おもしろさうし」の類推表記の範囲と用例の提示の仕方、それに参照した先行研究について説明しておきたい。

ここでは類推表記のうち、へ○↓u(ウ段の仮名で書かれるべき語がオ段の仮名でも書かれている語)の表記に限定して考察するが、今回は厳密に検討を行うために地名等の固有名詞や大和方言と対応しない語や漢語は、本来的な表記の認定が困難なところから、取り上げなかった。それから動詞の連体形語尾のへ○↓uは、『万葉集』の東歌に見える「比古布祢(引)船」「万一四一三四三一」などの上代東国方言と相通じる面があるのではないかという見方もあり、これは別の観点から考える必要があるので、ここでは取り扱わないことにした。

用例の挙げ方は、まずウ段で表記された語を一例だけ示し、次いでオ段で表記された語の全用例を列挙し、その頭に「・」印を付ける。また、括弧内には語義の目安となる漢字を当てた。そして、「・」印の上に付した「◎・○・×・△」の四種の印の意味は、次のとおりである。

◎↓類推といわれるへう↓○表記の直前にア段ないしオ段の仮名が来ている場合。これは母音の「きこえ(響度)」が口の開きの大小に応じて、a・o・e・u・iの順に小さくなるところから、「きこえ」が大きく印象度の強いa・oが本来ならばuで発音されるべき語の直前で働きのかけた結果、口室の狭いuは口室の広い同じ円唇性のoに転じ、それを忠実に聞き写したと考えられるもの。

○↓類推といわれるへう↓○表記の直後にア段ないしオ段の仮名が来ている場合。これは「◎」印の場合が直前のa・oであったのに対し、「○」印の場合は直後のa・oが影響を与えたと考えられるもの。ただし、これは直後の音の影響ということもあり、一単語内のものに限る。

×↓類推といわれるへう↓○表記の直前または直後にア段およびオ段の仮名が来っていない場合。△↓語の解釈に再考の余地があると考えられる場合。

テキストには、外間守善「おもしろさうし」(角川書店)を使用した。また、例を集める際には、仲原

善忠・外間守善「おもしろさうし辞典・総索引(第二版)」(角川書店)と高橋俊三「おもしろさうしの国語学的研究」(武蔵野書院)を利用した。

二

以下、実例を示しつつ、順に見ていく。

〈ウーオ〉(「う」で書かれるべき語が「お」でも書かれている語)

㉑ うけわちへーおけわちへ(浮け給いて)

にぎりかた(右方) うけわちへ

[二三一九一七]

◎・ひぢやりかた(左方) おけわちへ

[二三一九一七]

㉒ うまれてーおまれて(生まれて)

おぎもうち(御肝内)の うまれて

[三一〇〇]

◎・おぎもうち(御肝内)は おまれて

[三一九九]

◎ うるわしーおるわし(麗し)

あまみたまちな(玉綱) うるわし

[二二一七一]

◎・あまみたまちな(玉綱) おるわし

[二二一六三二]

◎・あまみたまちな(玉綱) おるわし

〔二一—一四七〇〕

④うゑたびおひたび(初旅) ⑤「ゑ」と「ひ」は通用仮名

みぢよもい(人名) が うゑたび

〔二〇—五四一〕

◎・みてもい(人名) ぎや おひたび

〔二一—九五七〕

⑥うへておへて(植えて)

ごゑくあやみや(越來綾庭)に こがねけ(金木)は うへて

〔二—七五〕

◎・くねふげ(九年母木)は おへて おちへ(置いて)

〔一三—九八一〕

うゑておゑて(植えて)

くわげ(桑木) うゑて

〔二七—二〇二〕

△・しらけ(白木) おゑて きよらけ(清ら木) おゑてからは

〔二一—六三五〕

△・しらけ(白木) おゑて きよらけ(清ら木) おゑてからは

しまでん(島でも) くにで

ん(国でも) みおやせ(奉れ)

〔二一—四九八〕

△・しらけ(白木) おゑて きよらけ(清ら木) おゑてからは

しまでん(島でも) くにで

ん(国でも) みおやせ(奉れ)

〔二一—五五三〕

⑦うちおち(内)

あよ(肝)がうちの すぐれて(勝れて)

〔九—四九〇〕

◎・あよ(肝)がおちの すぐれて(勝れて)

〔三一—一〇〇〕

⑧おしうけておしおけて(押し浮けて)

いちやきよら(板清ら)は おしうけて

〔二一—四八一〕

×・いたきよら(板清ら)は おしおけて

〔二一—六二三〕

右の②③の内、④については「△」印が三例あるが、これらは語の解釈に再考の余地があると思われ。つまり、「おゑて」は「植ゑ」ではなく、上二段動詞「生ひ」の可能性があるのでないか。それは奈良・平安朝方言では上二段動詞の連用形はイ段であるが、それが「おもろさうし」では、上二段動詞「降り」は「おれ」のようにエ段の仮名で表記されているのである。だとすると、「生ひ」が「おゑ」と表記(「ゑ」と「へ」は「おもろさうし」で通用可)されたと考えることが出来る。意味も、「木が大きく生育して」で、文脈上も無理なく解釈できるように思う。一方、⑤の「◎」印の例は、「くねふげ(九年母木)は おへて」で、「くは植えて」の意で解せる。「植えて」の場合には、「ごゑくあやみや(越來綾庭)に こがねけ(金木)は うへて」のように助詞の「は」があるのに対して、「△」印の三例には助詞「は」が無いのは「生ひ」だからではないだろうか。

また、「ウーオ」では⑥のみが「×」印であるが、「おしおけて(押し浮けて)」は「おし」の「お」に引かれたものかも知れない。

〈クーク〉(「く」で書かれるべき語が「こ」でも書かれている語

①くくにーこに(国)

おや(親)くくに

[二四一〇三二]

◎・あんじおや(按司親)こに

[二四一九九三]

①くさーこさ(軍)◎「くさ」の「い」の脱落した形

せくさ(精軍)

[三一九七]

○・せこさ(精軍)

[三一九四]

○・せこさ(精軍)

[三一九七]

①くちーこち(口)

こがね(金)くち

[二三八八四]

◎・てだ(太陽)がこち

[二一七二七]

くちやーこちや(口)

[二一三二]

◎・あか(赤)ぐちやが

[三一〇八]

◎・あか(赤)ごちやが

[五二八五]

①くしやくーしやく(杓)

みしやく(御杓)

◎・みしやく(御杓)

[七三三七]

◎・みしやく(御杓)

[七三三五]

◎・みしやく(御杓)

[一三二七五九]

◎・みしやく(御杓)

[一九一三二九八]

①ちよくーちよこ(強く)

きも(肝)ちよく

[二〇一五二九]

◎・はりつな(張り綱)やちよこ

[二三八〇六]

①②の内、①を除くすべてが、「」◎「印である。①だけは「○」印であるが、「さ」の影響で「こ

さ」となったのであろう。

〈スーン〉(「す」で書かれるべき語が「そ」でも書かれている語)

①あすびーあそび(遊び)

あすび よわれは

[二一一]

◎・より(踊り)あそび ならて(習って)

[二四一〇三二]

「遊び」は現代琉球方言でもアスに対応しているところから、「あそび」は本土の発音なり表記法なりが混入したもの(つまり類推表記)と考えられている。しかし、これは「す」の前の「あ」の影響

で、「そ」に変化したとも考えられる。また、「おもろさうし」の原本は存在しないので、語写の可能性も否定できない。なお、「あすく」が九三例に対して、「あそく」は右に示した一例のみである。

《ヌーノ》(「ぬ」で書かれるべき語が「の」でも書かれている語)

①ぬくーのく(貫く)

なわ(縄) ぬきやり

〔二一—一四七〇〕

◎・いと(糸) のきやり

〔二一—一四七〇〕

◎・くもこまたまなわ(雲子真玉繩) のちやる(貫きたる)

〔二—一七二〕

◎・まこちあな(真東風穴) のきあてれ(当てれ)

〔二〇—五三六〕

◎・よこすもの(寄越す物) やてや のきあげみづ(上げ水)

〔二七—二二二〕

②ぬしーのし(主)

しま(島) のぬし

〔三一—一〇四〕

◎・世ののし

〔三一—一〇四〕

◎・しまはちめ大のし

〔三一—一〇〇〕

③ぬすーのす(盗)

ぬすとみや(盗人猫)

〔二〇—一三六六〕

×・のすで は(佩) ちやる

〔二〇—五四六〕

④の「のす」は、「ぬすで(盗んで)」表記が無いので決め手に欠けるが、「盗」以外の解釈は現在のところできない。

《フーホ》(「ふ」で書かれるべき語が「ほ」でも書かれている語)

①おれーぼれ(群れ)

ぶれしま(島)

〔三一—七六二〕

×・丞げ あがる(上がる) ぼれぼし(星) や

〔二〇—五三四〕

「ぼれぼし」は、「ぼし」の「ほ」に逆に引かれて、「お」が「ほ」に変化したものかも知れない。

《ムーモ》(「む」で書かれるべき語が「も」でも書かれている語)

①むすめーもすめ

しらとん(殿) のむすめ

〔二六—一六九〕

◎・あわのおや(安和の親) のもすめ きもちやおや(肝痛親) のもすめ

〔二四—九八七〕

《ユーヨ》(「ゆ」で書かれるべき語が「よ」でも書かれている語)

⑤ ゆうどれーようどれ(夕凧)

ゆうどれが しまれば

〔一〇一五三〇〕

△・ようどれが しまれば

〔一〇一五二三〕

右の外、三八例すべて「△」印

① ゆわいーよわい(祝い)

とし(年)のはぢまりに ゆわい事 すれば

〔五一二五三〕

○・とし(年)のはぢまりに よわいごと みおやせば

〔五一二五四〕

○・あよそろ(肝揃)て よわい事 みおやせ

〔二六一一四六〕

② ゆきあてーよきあて(行き会って)

てるかはと ゆきやて

〔六一三四〇〕

◎・てるかはと よきやて

〔一一六〕

◎・てるしのと よきやて

〔一一六〕

右の外、八例すべて「◎」印

③ ふゆーふよ(冬)

ふゆは 御さけ(酒) もる(盛る)

〔二二一六七二〕

×・ふよ なつ(夏)む しらず(知らず)

〔二二一六四三〕

×・なつ(夏) ふよむ しらず(知らず)

〔二二一六四三〕

×・ふよは 御さけ(酒) もる(盛る)

〔二二一六四三〕

×・ふよは 御さけ(酒) もる(盛る)

〔二五一一〇六九〕

×・なつ(夏) ふよむ わからず(判らず)

〔二五一一〇九二〕

×・ふよ なつ(夏)も わからず(判らず)

〔二五一一〇九二〕

④ つゆーつよ(露)

あさ(朝) つゆは けりあげて よう(夜) つゆは けりあげて

〔一三一八三三〕

×・あけのつよ おさちへ(濡れて) しものつよ おさちへ(濡れて)

〔一一三九〕

右の外、六例すべて「×」印

右の内、「△」印を付けた⑤の「ようどれ」は「夕」の意ではなく、「夜」の意の可能性もあるのではないか。なぜなら、「おもろさうし」には「ようあけ(夜明け)」「ようつゆ(夜露)」などといった例があるからである。また、「二〇一五三三」以外に「ようどれ」表記は三八例あるのに対して、「ゆうどれ」表記の方は「二〇一五三〇」のみである。ただし、「夜凧」では表現としておかしいか。いずれにしても疑問の残る表記例である。

〈ル→ロ〉「る」で書かれるべき語が「ろ」でも書かれている語

◎よるーよる(夜)

よる なんか(七日) あすで(遊んで)

◎・よるは つき(月) てる(照る)

「七一三六七」

「八一四五九」

以上を閲覧して、どのようなことが考えられるであろうか。結果をまとめれば、「◎」印が㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿「○」印が①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿「△」印が㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿「×」印が①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿「○」印が二語あるという結果は、次のように解釈できよう。

ところで、「×」印の付いた中で、㉔「おしおけて(押し浮けて)」「㉕」のすで(盗んで)」「㉖」ぼれぼし(群れ星)は、それぞれに対応する「おしうけて」「ぬすで」「ぶれぼし」の完全対応例が見出せない。また、㉗「ふよ(冬)」「つよ(露)」は共に語中の「よ」であるが、これは「よ」と「ゆ」が他のウ段とオ段の仮名の混用例と比較して多いことと関係があるかも知れない。結局、「×」印が五語、「△」印が二語あるというものの、「◎」印が一六語に、「○」印が二語あるという結果は、次のように解釈できよう。

ウ段音が本来的な表記であるにもかかわらず、オ段音の仮名で表記されたというのは、「きこえ」が大きく印象度の強い a・o が、その音節の直前または直後(多くは直前)で働きかけることで口室の狭い u は口室の広い同じ円唇性の o に転じたのであり、それを表記者が忠実に聞き写したのではない

か。

三

ここで、「おもろさうし」全体の表記のあり方について、筆者の見通しを言えば、「おもろさうし」は詠唱されていた実現音を表記者が聞いたとおりに文字化したものである、ということになる。こう考えることで、「おもろさうし」の同語異表記例の大部分は説明できるように思う。以下、その根拠を三つ、具体的に示そう。

一つ目は、「おもろさうし」における助詞ガの表記についてであるが、冒頭「一一」のオモロで説明しよう。

一 きこゑ大きみぎや

おれて あすびよわれば

てにがした

たいらげて ちよわれ

又 とよむせだかこが

又 しよりもりぐすく

このように、Aのカ・サ・タ行の四段動詞の場合には「ちへ」表記で、Bのハ・マ・ラ行の四段動詞の場合には「て」（マ行は「で」表記になっている）。この区別は実際の発音を記録したものと考える以外にないだろう。そして、この書き分けは脱落した連用形の語尾を再構し、語を認定する際に役立つ。実例を挙げて見る。

なちへ（成して）―なて（成りて）
かわちへ（交わして）―かわて（交わりて）
まわちへ（回して）―まわて（回りて）
もどちへ（戻して）―もどて（戻りて）

このように「て」と「ちへ」には厳然とした書き分けが見られ、例えば大和的に「て」表記に統一されることはなかった。これも表記者がオモロ詠唱時の助詞テの実際の発音を聞いたとおりに書き写した証拠の一つと言えよう。

三つ目は、「おもろさうし」では「按司（王国時代までの沖繩における土地・人民の支配的人物）」を「あんじ」または「あぢ」と表記し、どちらか一方に統一していないが、それは発音が異なっていたからに相違ない。すなわち、「按司」はアヌシ（吾主）が原形と思われ、それが変化する過程（*ansu*）

ansi）>*anzi*（あんじ）>*azi*（あぢ）の段階（遅速ないしユレ）を忠実に書き分けた結果と解釈できるのである。

また、同じような現象（表記上のユレ）に「頂（最上）」を「つんじ」または「つぢ」と書いた例が「おもろさうし」に見えるが、これはツムシ（旋）が原形と考えられ、これもその変化の過程（*tumusi*）>*tunzi*（つんじ）>*tuzi*（つぢ）で、「按司」の場合と同様二通りの表記がなされたのであろう。なお、詳細は、拙論「按司（アヂ）の語源について」（『鶴見大学紀要・国語国文編』二六号・一九八八年三月）を参照いただきたい。

以上、「おもろさうし」は詠唱されていた実現音を表記者が聞いたとおりに文字化したものだ、と推定し得る根拠を三点ほど示した。

おわりに

さてそうすると、「おもろさうし」で「内」を「おち」、「国」を「こ」のように表記した、いわゆる類推表記（*u*→*o*）と呼ばれるものはどのように解釈すべきであろうか。

外間守善「沖繩の言語史」（法政大学出版局）は「『おもろさうし』の仮名遣いと表記法」（一七三頁）で、次のように説く。

表音的仮名遣いは、帯を「うび」、雲を「くむ」と書く書き方にも表われ、国語的仮名遣いの「おび」「くも」表記と対立している。

このような国語的仮名遣いと表音的仮名遣いの摩擦の中で、国語的仮名遣いを表記法の規範にしようとする規範意識が強く働いて、婿を「もこ」、国を「こに」とするようないき過ぎた類推表記(三番めの混乱因)が生まれたのである。

確かに、琉球方言の音韻変化に順行するo母音からu母音への変化を書き記した、表音的仮名遣いによるウ段とオ段の仮名の混用表記の例(「おび・うび(帯)」「くも・くむ(雲)»)は存在する。だがそれは、「おもしろさうし」全体を通して見た場合にはそれほど多くない。そこで、諸先学はo母音からu母音への変化は、「おもしろさうし」編纂当時にどのくらい進んでいたと考えているのだろうか。その点について、高橋俊三『おもしろさうしの国語学的研究』(武蔵野書院)は、その第二章「音韻詳論」第三節「オ段音とウ段音」において諸説を紹介している。今、それを参照し、まとめると次のようになる。

伊波普猷↓o母音からu母音への変化は、ほとんど進行していない。

外間守善↓o母音からu母音への変化は、かなりの程度まで進行していた。

中本正智↓o母音とu母音は、統合していた。

柳田征司↓o母音とu母音は、合一化していない。

高橋俊三自身は、「oからuへの変化の過渡期」(同書の二一八頁)と見なし、どのくらい進行していたかについては特に言及していない。ただ、ここで注意しておきたいことは、「おもしろさうし」は歌謡であるから、o母音からu母音への変化の進み具合が通常語とは異なっていた(それほど進行していなかった)かも知れないという認識である。この認識は重要で、通常語がどうであったかは、別途に考察する必要がある。

現在のところ筆者は、本稿の「三」の冒頭で述べたように、「おもしろさうし」は基本的に詠唱されていた音を表記者が聞いたとおりに文字化したものである、という見通しを立てているので、「帯」を「おび」と「うび」、「肝」を「きも」と「きむ」のようにオ段とウ段の仮名で表記してある語は、それらの音が動揺していた(表記者がそのように聞きなしていた)のだと、ありのままに素直に受け止めた。

このような立場をとる以上、「国」を「こに」と表記したものは、実際にコニと発音されていたと筆者は判断する。そして、クニ(国)がコニと発音された理由については、本稿「二」の最後に記したとおり、「◎」「○」印が多数を占めているところから、前後の母音の影響下でへ↓o表記が出現したと考える。

今回の考察で、従来の規範意識による類推表記という見方、つまりウ段の音をオ段の音に戻そうとする意識の過剰がクニ（国）と発音されていた語を「こに」と書き直させたとする考えを完全に否定することはできないのかも知れない。しかし、助詞ガや助詞テの表記を大和的に「が」や「て」に統一しなかったこととの整合性が得られない以上、発音されたままに表記されたという一貫した立場で考える意味は十分あるように思う。従来の説に多少なりとも疑問があるならば、発想や視点を変えるなどして、再検討をする必要があるだろう。

付記

本稿の元になったのは、拙論「オモロ（神歌）表記小見」〔『鶴見日本文学会報』三六号・一九九五年一月〕で、それは二千字余りの小論であった。ただし、ここでは語頭のヘ↓ロ↓に限定し、検討を加えた。なお、結論に関しては、本稿と変わりが無い。